

ほととぎす

堀辰雄

青空文庫

われぞげにとけて寐^ぬらめやほととぎす

ものおもひまさりこゑとなるらん

蜻蛉日記

その一

「昔、殿のお通いになつていらした源の宰相^{なにがし}とか申された殿
 の御女^{むすめ}の腹に、お美しい女君が一人いらつしやるそうでございます。
 その女君なんぞをお引き取りになられては、如何なものでござい
 ましたしょう？　なんでも今は、お二人共、兄^{しょうと}に当られる禪師^{ぜんじ}の

君の御世話になられ、志賀の麓ふもとに大層心細いお暮らしをなすつて入らつしやるそうでございますが……」

やっと春の立ち返つた或日、そんな事を不意に思い出したように年とつた女房の一人が、私の前で話し出した。そう、そう言え
ば、そんな御方の事も聞いていたつけ……と私は以前殿にそうい
う女の御方もあられた事など、もう殆ど忘れかけようとしていた
のを、何ということもなしに思い出させられた。——なんでも故
陽ようじょう成院いんの御後だとか云われる、その宰相がお亡くなりになつ
て、跡にたった一人の御女むすめばかりがお残されになった時、そう云
う事をお聞きになるとそのままにはお聞き過ぎしになれない例の
御性分から、殿はその御方を何くれとなくお世話なすつていらし

つたようだったが（一度などは私のところからもあるたけの単衣^{ひとえ}をその御方の許へお取り寄せになった事もあつた——）、そのうちその不為^{ふしあわ}合せな御方は、御自分の本意^{ほんい}からでもなく、ときおり殿をお通わせになさつていられるらしい御様子だった。昔^{むかし}氣質^{かたぎ}の人らしく、それに殿よりも少し年上だったりしたので、それまで大ぶお躊躇^{ためら}いなすつたらしかつたが、やはり何かと行末が心細くお思いなされていた折でもあろうし、そう頼もしそうにもない殿をもお頼みになるより外はなかつたのかと思えば、反つてお気の毒なような位であつた。しかし、殿との御仲は、恐らくその御方のお思いなすつたのよりも、ずっと果敢^{はかな}いものにちがひなかつた。——その後一年と立たないうちに、その御方のところに女の

御子様がお生まれになったとか云う事を耳にして、或日私がそれをそれとなく殿にお訊ききすると、「そう、そんな事もあつたかも知れんな」と殿はいかにも冷淡おっしそうに仰おやられたぎりだった。私の前なのでわざとそう素知らぬふりをして入らっしゃるばかりでもなさそうだった。そして、「どうだ、ひとつお前がその子を引き取つて育ててやらないか？」などといつも子の少いのを歎いていた私に反つて挑まれるように仰おやられるのを、私は胸を刺されるような思いで聞いていた事も、今、ひよつくりと思ひ出す。しかし、そんな一昔前の自分と言つたら、只もう自分の不為いたわ合せな事ばつかしで胸を一ぱいにしていて、自分のほかにもそんなお傷いたわしい御方さえいらっしゃる事なんぞ、知らずにいられたら知らず

にいたい位だった。……

そういう一人よがりな私であつたのに、それがこの頃、身も心も衰え出しているとても云うのか、ときおり見る夢までが妙に氣になつてならない程で、行末なども何かと心もとなくて、自分が死んだ跡には道綱^{みちつな}だけがただ一人ぎり頼りなく残されることを思うと氣がかりでならなかつた。数年このかた物^{もの}詣^{もうで}などするにつけてもどうかもう一人ぐらい女の子でもお授け下さるようにとお祈りし続けていたが、だんだんそんな望も絶えた年頃になり、もうこの上は何処からか賤^{いや}しくない腹の女の子でも引き取つて、それを養うよりほかはあるまいなどと、誰れかれにともなく私はそんな事を言い言いしていたのだつた。……

——私は、恐らく殿なんぞにももう忘れられているかも知れないような、その不遇な少女を自分が引き取ってもいいような事を言うと、私にその話をした女房はすぐ伝^{つて}手を求めて問い合わせて呉れたが、その日かげの花のように誰にも知られずにこっそりと大きくなつた少女はもう十二三ぐらいになっているそうだった。そんないたいいけな子だけを相手に、その不為合せな御方は、志賀の東の麓に、近江の湖を前に見、志賀の山を後ろにした、寂しい里に、言いようもなく心細く明し暮らして入らっしゃるとかいふ事だった。その二人のお身の上をつぶさに聞けば聞くほど、何か私も身につまされて、そう云うお暮らしではさぞその御方もこの世に思いの残るような事ばかりであろうと思ひやられるのだった。

その人の異腹の兄だという、その禅師の君はいま京に住まっておられた。その禅師の君と、その話を持ち出した女房とが昵^{じつ}近^{こん}の仲だったのである。で、すぐその禅師の君に話をしに往つてくれたが、「それは何よりな事です。早速志賀の里へ往つて、お話をして参りましょう。どうも世の中があまりに果敢いようなので、いつその事尼にでもさせようかと思つて、あちらへ遣つてあつたのですから——」と云うところよい返事だった。それから二三日後、その禅師の君は志賀の山を越えて往つてくださった。たまにしか訪れることのない、そんな異腹の兄がそうやって突然訪れていったのを、その世を侘^わびた女は何事かと訝^{いぶ}し^かそうにしていたが、その話を切りだすと、はじめのうちは黙つて聞いて、なんとも言

わずに只泣いてばかりいたけれど、ようやく口を開いてこう云う返事をした。「わたくしはもうこれぎりの身と思い、自分の事なんぞはどうから諦めておりますが、ただ一しよにいる此娘がこのままではあんまり不便で、なんとか為様しやうはあるまいかと思つて居りました。まあ、そう仰やつてくださる御方がおりなれば、どうぞあなた様のよいようにお極めなすつて下さいまし……」——

そう云うその人の御返事だったという事を、その翌日京へ歸つた禪師の君から聞いて、その女房は私のところへ来て、一部始終を繰り返し、「本当に好うございましたこと。そう云う御宿縁でもございましたのでしよう。が、何よりもまあ、そのお気の毒な御方のところへ、御文をあなた様から早速差し上げなさなければ

——」と言うのだった。私も先ずそうしたいと思つていたところだったから、その日の夕ぐれ、その志賀の御方のところへ最初の消息を認めた。^{したた}「かねがねよりあなた様の御ん事はお聞き及びしておりますが、これまではついぞ御消息も差し上げませんでした。突然、こういう私のような者からこんな無^{ぶしつけ}駄なことを申し出されて、まことに思いがけなく思し召されたでもありませんようにけれど、禅師様がわたくしの日頃よりの心細い憂えをそこもとへお伝えなさいましたのを心よく御承^{おうけひ}引き下さいました由、ほんとうに心から嬉しゅうございました。何かと遠慮いたされます斯^かかる申し出^{いで}ゆえ、ずいぶん躊躇もいたしましたけれども、いろいろとそちらの御様子などお聞きいたし、若^もしやそんなおいとしい

御子様をもお手放しなされはすまいかと思いましたが、ごさいますので——」などと心を入れて認めたのであった。

御返事は翌日来た。長い御消息だった。養女の件は「喜んで」

などといかにも心よい返事をして下すったが、その同じ御消息の中に、以前殿とおかたらいになられた日頃の事なんぞを何かと思ひ出されて細々^{こまごま}と書かれてあつた。自分なんぞの想像以上に不^ふ為^{しあわ}合せであられたらしいお身の上には、何かと胸を打たれるような事のみ多いのだった。「いつのまにやら目の前を霞が一ぱい立ちこめましたようで、筆の立所^{たちどころ}もわかりませず、たいへん見苦しい字になったようでございますけれど——」と最後を結ばれてあるのも、いかにもその御方らしい真実な感じがあるように思えた。

それから二度ばかりその御方と長い消息をとりかわし、とうとうその少女をわたくしの養女とする事になったので、又ぜ禪師の君が出向いて往かれて、その少女を志賀の里からともかくも京へ連れて来られたのだった。

その事を聞くと、自分の愛まなむすめ娘をそうして京へ出立させて、

いよいよ寂しくなられたその御方のお心の中はまあどんなであらうかと、それからそれへと尽きせずお思いやりしていたが、「それにしても、あんなに気弱そうな御方をこのように決心させたのも、若もしかしたら殿がその女を御世話くださるような事にでもなりはしないかと思われなすったからかも知れない。そう思つて入らしたとしたら、私なんそのところへお寄こしになったって、

殿はこの頃こちらへもあまりお見えにならないものを」などと、こうしていつまでも殿との仲を絶とうとしては絶たれずに中途半端な暮らし方をしている意気地のない自分の事が反省せられ、こう云う自分とも知らないで托せられて来るその少女までがかわいそうな氣もしたが、それもいまさら詮ない事、一旦こうと契つた上はもはや取り返すことは出来ないと思われるのだった。

この十九日が日が良いというので、道綱にその少女を迎えに往つて貰うことにした。出来るだけ目立たぬようにと、只、網代あじろぐ車るまの小ぎっぱりとしたのを用意させて、それに馬に乗った男共を四人、下人を数人だけ附添にした。やがて道綱は、自分の車のうしろにこんどの仲人役の女房を載せて、出かけて往くことにな

った。

丁度皆の出かけようとしている所へ、殿から珍らしくも御文があつた。何だかこちらへ入らつしやりそうな御様子にも見えるので、きよう殿にいきなりその養女を見られてはしようがない、まあ暫くは知られないようにして、なりゆきに任せて置いた方が好いと思うものだから、出来るだけ急いで連れもどるようと皆に言いつけた。

しかしそうやって急がせた甲斐もなく、それより殿が一足先きに来てしまわれた。まあ、どうしようかしらと思ひ惑っているうちに、やがて皆も歸つて来たようだった。殿は少し不審そうにしていらしつたが、道綱が、かりぎぬすがた狩衣姿ではいつて来るのをお認め

になると、「大夫はどこへ行つていたのだ？」とお訊ききになつた。道綱は、さも困つたような様子で、何かと苦しうに言い紛らしていた。私は側からそれを見るに見かねて、いずれ一度は殿にも打ち明けなければならぬ事なのだからと思つて、「実は、私どもの身よりが少くて、あまり心細うございましたので、或る御方に棄てられました子を貰つて参つたのでございます」と言葉のうらに少し皮肉を籠こめながら言つた。

「それは見たいな」と殿はしかし上機嫌そうに仰おつしやつて、それからふと私の顔を見据えるように「一体、誰の子なのだい？」と小聲になつて訊かれたが、私が相変らず笑っているような、いないような目つきをしているのに漸やつとお氣がつきになると、急に御

自分も目を^{かがや}赫かせられながら、「だが、まさかおれがもう年を取ったので、代りに若い奴を手に入れて、おれなんぞは追い出そうと言うのじやあるまいなあ」と言われた。

「御目にかけてもよろしゅうございますが——」と私もそれについて釣込まれてほほ^え笑み出しながら、「——でも、御子様にして下さいますか？」

「いいとも。そうしようではないか。——だが、まあ、どんな奴だか早く見せてくれ」殿はいかにも好奇心をおさえ難そうに急^せかされた。私も私で、まだ一目も見ないその少女が見たくて溜^{たま}らなかつたので、すぐにこちらへ来るようにと呼びに遣らせた。

その少女は十二三と聞いていたが、その年にしては思ったより

も小さくて、まだいかにも子供子供していた。近くへ呼び寄せて、「立って御覧」と言うのと、素直にすぐ立って見せたが、身丈みのたけは四尺位で、いかにも姿のよい子で、顔なども本当に可哀らしかった。只、髪だけは、幼少の折からの辛苦がそこにまざまざと見られでもするかのように、大ぶ抜け落ちて、先きの方が削そがれたうになつてい、身丈には四寸ばかりも足りなかった。

そういう穉いとけない少女を殿はつくづくと見入つていらつしたたが、「可哀らしい子じゃないか。一体、誰の子なのだ？」とあらためて私の顔を見据えられた。

「本当にお可哀いとお思いなされます？」と私は言いながら、「では、お明かししてもよろしゅうございますけれど——」と静

かにほほ笑んでいた。

殿はとうとうこらえ兼ねたように言われた。「早く教えてくれ」
「まあ、おうるさいこと」私は急にすげなさそうに言った。「まだお分かりになりませんか？　あなたの御子様ではありませんか」
「何、おれの子だって？」殿は側で見ているのもお気の毒な位、おあわてなすった。「それはどういうのだ、何処のだ？」

私はしかし、相変らず、冷やかにほほ笑んでいるぎりだった。
「いつかお前に貰ってやらないかと言った、あの子か？」殿はそれを半ば御自分に向って問われるように問われた。

「さあ、その御子様かも知れませんが……」

殿は、そういう私には構わず、一層しげしげとその少女を見入

られていた。「やはりあいつらしい。——だが、あいつがこんなに大きくなつて居ようなどとは夢にも思わなかった事だ。いまごろ何処をうらぶれていることだろうか、ときおり急に気になり出すと、もう矢も楯も溜^{たて}らない位だったが……」そう云う御声はだんだん震え出してさえいられた。

少女はそこに泣き伏していた。それを見ていた側近の者共も、そんな物語にでも出て来そうな奇しい邂逅^{かいこう}には泣かされない者はいないらしかった。——そういう裡^{うち}でも私だけは、まるで涙ももう涸^かれてしまったとでも云うように、そしてそんな自分自身をも冷やかに笑っているより外はないかのように見えた。

やがて、殿が何度となく単衣^{ひとえ}の袖を引き出されては御目を拭わ

れていらつしやるのを、私は珍らしい物でも見るようにそのまま眺めていたが、それから漸つと言った。「もうお歩行あるきのついでに

もお立ち寄りにならなくなったような私なんぞの所へ、こんなに可哀らしい子が参りましたけれど、これからはどう遊ばします?」

暫く殿はなんともお返事なさらずにいた。が、ようやく顔をお上げになった時は、もういつものように私に挑むように目を赫かせていらしった。そして殿は「いつその事おれのところへ連れて往こう。——なあ、小さいの」と言いながら、少女の方へふり向かれた。少女はどうしてよいか分からず、いかにも当惑しきつたように、しかし顔だけはあでやかにほほ笑んで見せていた。……

翌朝、殿は少女を又お呼び寄せになって、髪などをしきりに撫

でておられた。そうしてお帰りぎわに、「さあ、これからおれの所へ一しよに往くんだよ。いま、車をこちらへ寄せさすから、そうしたらさっさとお乗り」などとそんな小さな子にまで^{からか}擲揄われていらした。少女はただもう困ったように袖を顔にしていた。殿はそういう少女の可憐な様子を、心残りそうにかえり見られがちに、帰って往かれた。

それからは御文を寄こされる度毎に、端にきまつて「撫子はどうしているか」などとお書き添えになられるのだった。「山^{やま}賤^がの垣は荒るとも」などと云う古歌を思い出されてか、そんな撫^{なでし}子^こなんぞとあわれな名をいつのまにかお附けになつていられるのも、本当に心憎いほどなお思いやりだこと。あいにくそれから

殿も御物忌おもものいみつづき、こちらも何かと物忌がちで、殆ど門も鎖とぎしたぎりなものだから、入らつしやろうにも入らつしやれず、そういう御文を毎日のように、門の下から差し入れさせて往かれるのも、それだけでもまあ大層なお心變りのように見える。

それから十数日ばかり立つた或日の未ひつじの刻頃、「殿がお見えです」と言い騒さわいで、俄にわかに中門を押し開けなどしているところへ、車ごとお這はい入りになつて来られた。

車の傍に男共が数人寄つていつて、轅ながえをおさえながら、簾みすをまき上げると、中から殿はお降りになられて、いきなり「綺麗だなあ」と仰おつしやりながら、いまを盛りと咲いている紅梅を見上げ見上

げ、その下を徐かにお歩きになつて入らした。

そしていつになく上機嫌そうにして入らしたが、あいにくあすは方かたふさが塞りになつてゐる事を申し上げると、「そんならそう

と、なぜ先に知らせて置いて呉れなかつた」といかにも不満そうに仰やられた。「若もしそうお知らせして置きましたら、どうなさいました？」と私はつい言わなくともいいのに言いかえした。

「むろん方かたち違えをして来たさ」と殿も殿で、あんまり見え透いたような事を仰やるものだから、こんどは私も少しばかり気色を顔に出して、「それほどのお氣持がおりなさいますかどうか、今後に試めさせていただきます」と応じた。

そんな小さな事から、又いつものように不和が高じそうになつ

て来たので、殿はすこし気むずかしい顔をなすっていられたが、やがてこないだの少女が呼ばれて来ると、やっと又上機嫌になられて、側にお呼び寄せになり、髪などを撫でられながら、「この子には手習や歌なんぞよく仕込んでやってくれ。そういう事は、お前になら任せて置けるからな。——まあ、もうすこうしたら、向うの家の奴なんぞと一しよに裳着もぎの祝をしてやろうよ」などと愉たのしそうに御相手をせられていた。そのうち日が暮れ出したので、「おなじ事なら院へ参ろう」と言い出され、又皆を騒がせて車にお乗りになり、帰って往かれた。

殿をお見送りした後、一人ぎりになって、私はそのままいつまでもその暮れようとしている庭面にわもをぼんやりと見入っていた。一

種言うに言われないほどの好い匂が、ときおりその夕闇のなかに
立つて、それがまだ驚なんぞを寐つかせないでいるらしい。西の
対あたりから、それに雑つて、つい今しがた少女の習い出したら
しい琴の幼い調べが途絶えがちに聴えて来る。——私はふとこ
んな美しい春の夕をさえあの御方はまあ山里にお一人でどうして入
らつしやるだろうかと思ひやつた。あたりのいかにも充ち足りた
ような、^{ものう}懶い位の、^{なご}和やかさが、反つてそういう悲しみの多い人
のお気の毒な身の上を、その一々の悲しみをまで、残酷なほど鮮
かに、^{いきいき}生々と私に描かせていた……

この春は、祭や物^{もの}詣^{もうで}などにその少女が珍らしがつて往きた

そうにしているので、そう若いものばかりだけを出してやることも出来ないのです、私も連れ立って一しよに出かける事もつい多かったです。

しかし又春の末からは何かと物忌が重なり、家に閉じ籠もりがちだったけれど、去年までは家の柱などに御守札などを押し付けてあつたりするのを目に入れると、この夢ほども惜しいと思われる生をさも惜しんでいるかのような気がされて、自分らしくない事だと心苦しかったが、今年はどういふものか、そう云う厄除けのようなものすら無関心に見過ごされ、何事もないように静かに忌にこもっていられるようになった。それもこの少女のために気が紛れるのかと思つて、私は毎日のようにその少女を相手に歌

を詠んだり、手習をさせたりしていた。

殿もこの頃は物忌がちなので、お泊りになることは少ないが、よく昼間などお見えになる。そんな昼なんぞ、もう自分の老いがかつた姿を見られるのは羞はづかしいようだが、どうにも為し様がないので、少女を自分の側から離さぬようにして物語のお相手などしているが、いつも派手好みで、匂うような桜がさねの、綾模あやもよう様のこぼれそうな位なのを着付けていらつしやる殿にむか対っていると、いまさらのように自分の打ちとけて、萎しおたれたようななりをした姿がかえり見られ、可哀いさかりのこの撫子のために、こうしてわざわざ入らつしやればこそ、さぞ自分は殿には見とうもなく思われたらうと悔やまれがちだった。

あおいまつり

葵 祭が近づいた。その日になると、私は若い人たちを連れて、忍んで出掛けていった。暫く祭の行列を見物しているうちに、なかでも一きわ花やかに先払いさせながらやってくる御車があったので、どなたかしらと思つて注意をして見ていると、その前駆の者共のなかに幾人も見馴れた顔があつた。「矢つ張、殿だ」と思いながらも、自分達の車のまわりで「あれはどなた様でしょうか……いままでの中でも一番御立派なようだ……」などと人々がざわめいているのをそれとなく耳に入れてみると、こうして忍んだ姿で来ている自分達が一層みすばらしいような気がされてきてならなかった。簾をすっかり捲き上げられたまま、きらびやかにお通り過ぎになつて往かれたが、車上の人はまぎれようもなく、

あの方だった。——が、まあ何ということか、あの方はすぐ目の前をお通り過ぎになられながら、その瞬間私達の車をお認めになられたかと思うと、ふいと扇で顔をお隠しになられて、そのまま其処を通り過ぎて往かれてしまったのだった。

車の奥ぶかくに自分と一しよにいた撫子にもそれは気がついたにちがいはなかった。私がそれについては何んとも言わずに黙っていると、少女も心もち蒼いような顔をしながら、しかし車上の殿なんぞは見もしなかったような風をしていた。その少し蒼ざめた顔色は、家に帰るまで、直らなかつた……

夕方、そんな事が知らず識らずの裡に^{うち}歸りを早めた私達の車よりか、ずっと遅くなつてから、道綱の車が歸つてきた。

なんでもその祭の帰りぎわ、混雑をきわめた知足院のあたりで道綱の車は一台の小ぎっぱりとした女車のうしろに続き出したので、そのままその跡を離れぬようにして附けて往くと、向うでもそれに気がついたらしく、家を知らせまいとするのであろうか、ずんずん車を早めて他の車の間に紛れ込もうとするのを、とうとう最後まで附けて往って、その女の家（大和守の女だとか……）をつきとめて来たとか云う話だった。——その小さな冒険は、内氣一方に見える道綱にも少からず氣に入ったらしかった。そうしてその跡を附けて往った車の若い女のことを、その姿を見もしないのに、何んとか懐しく思おもい初そめているように見えた。

あくる日になって、何を思われたか、殿から御文を寄こされた。

しかし、きのうの出会いには一切お触れになっていなかった。私はその返事の端にすこし拗ねたように、「きのうは大層まばゆいばかりのお出立^{いでたち}だったと皆が申しておりますが、どうして私達にだけはお見せ下さらなかったのですか。本当に若々しいなされ方でしたこと」と書いてやったら、すぐ折り返し、「あれはおれの姿が老いぼれていて羞しさのあまりにした事なのだ。それをまた、けばけばしい姿なんぞと誰が言っているのか」などと書いて来られたが、よくもまあそんな空々^{そらそら}しい事が仰やれたもの。

そんな葵^{あおいまつり}祭^{まつり}が過ぎてから、殿は又かき絶えたように入らつしやらなくなつた。

道綱は、この頃、しきりに例の大和守の女むすめもとの許へ文をやつては、内気な子だから、女の方の返事の思わしくないのを、一人でもどかしく思っているらしい。私にはまだ何も打ち明けてくれないので、こちらも何も言わずに見ているよりしようがない。日ねもす何か憂わしげな様子で庭面にわもなど眺めながら暮らしているかと思うと、次ぎの日は小弓の遊びなどに出かけて往つて、きようは上手に射たなどと歸つて来るなりその日の模様をはしやいで皆に話したりするのだつた。

撫子の方はまた撫子で、ようやく世の中と言うものが分かりかけて来た少女らしく、あれから何か私に気を置いて、つとめて顔をさえ見合わせないようにしている。小さい心に過ぎていろいろ

思っている事もあるかと、いたいたしいような位。——私はもうこのまま殿がいつお絶えになろうとも、自分自身は思い残すような事もありあるまいと思われたが、只、こうしていろいろな夢をいだいて私のところにやって来たでもあろう撫子がまあどんなに胸の潰れるつぶような思いをする事だろうと、その事のみが氣づかわれるのだった。

もう梅雨つゆちかいそんな或日、突然殿があ祭の日からはじめてお見えになられた。私が空うつけたような顔ばかりして、いつまでも物を言わずにいと、「どうして何も言わないのだ」と、殿は私の機嫌をとるように言い出された。「何も言うことがございませるので——」と私が思わず生返事をする、殿は急にこらえ兼ね

られたようにお声を荒らげて、「どうしてお前は、来てくれない、憎い、悔やしいと、おれを打つなり抓^{つね}るなりしないのだ」などとお言い続けになった。私はしばらく打ち伏したまま無言で聞いていたが、稍^{やや}たつてから、やつと顔をもたげ、「わたくしの方で実は申し上げたかった事を、そのように何もかも御自分で仰^{おつし}やられてしまいましたので、もう私の申し上げたい事はなくなりまして」と言いながら、私はいつか自分がいかにも気味よげにほほ笑^えみだしているのを感じていた。

その日はそうやって一日中、二人共、むつつりとし合つたままで対^{むか}い合^あつていた。殿は撫子を呼びにやられたが、撫子までがきようは気分が悪いと言つてとうとう出て来なかった。殿はますます

す苦々しげな御顔をなすつて入らしつたが、それでも何かがお心残りのようにすぐにはお立ちにもならず、日暮れ近く、漸くお帰ようやりになって往かれた。

しばらく此日記を附けずにいた。みずから進んでそれを附けたような気にもならず、又、それを附けずにいることが気にもならなかったので、そのまま放っておいたのである。もともと、ながらく途絶えていた此日記を再び何んと云うこともなしにこの頃附けはじめていたのは、前のように自分で自分を何んとかしなければならぬと言った、切迫した気持なんぞからではなかった。只、あれほど自分の事だけでぎりぎり一ぱいになっていた私が、

こうしてあの方に棄てられた女の子を養うような余裕のある心もちにまでなり出したのが自分にも不思議な位で、それで筆をとり出したのだが、矢つ張、此日記を私に書かせたものは、あの方への、又、自分自身への一種の意地であつたかも知れぬ。しかし、そういう気もちもだんだん無くなりかかつている現在、その日記がこうして終るともなく終ろうとしているのも当然であるのだろう。此日記にいつかまた別の弾んだ心で向えるような日の来るまで、しばらくそれを仕舞っておくため、私はいま、この物憂い筆をとっていると言えようか。

ここ数日、雲のたたずまいが険しく、雨が思い出したように降ったり歇やんだりするような日が続いている。この頃はよく明け方

なんぞに時ほととぎす鳥なが啼ないているらしく、女房の一人が「ゆうべ聞

いた」などと言うと、他の女房がすぐそれに応じて「けさも啼ないていた」などと話し合っているが、人もあろうに、この私がまだ

この夏は一度もそれを聞かないなんぞと言うのは羞はづかしいような

気がする程。——それほど、この頃はどうか云うものか我にもなく

ぐつすりと寐ねてばかりいる自分をかえり見て、私は皆の前では何

も言わずにいたけれど、心のうちではひそかに「自分はいくらぐ

つすり寐ねていたって、本当に打ち解けて寐ねているわけではないの

だ。恐らくこの頃私自身にさえ見向きもされなくなってしまうた

私の物思いが、毎夜のように自分の裡うちから抜け出して、時鳥とな

り、あちらこちらを啼き渡っているのだろう」などと考え考え、

そんな負けず嫌いな気もちを歌によんだりして、わす纔かに悶を遣つていた。しかし、それを誰に見せようでもなく、私はそこいらの紙に書き散らしては、それがそのまま失せるもよいと思つていた。
……

その二

もう一年余も披ひらかなかつた此日記を取り出して、それにまだこう云う気もちではついぞこれまで向つた事もないようにさえ見える、心のときめきを感じながら、いま、夜の更けるのも私は知らずにいる。自分にとって附けても附けなくとも好いようなものに

なりかかっていた此日記を、再びこんな切ない心もちで手にとる事があるうとは、夢にも思わなかった事である。

頭の君^{かんきみ}がお立ち去りになって往かれたのは、もう余程前のことであろう。その跡、私はながいこと、灯をそむけたまま、薄暗いなかに、ひとり目をつむっていた。いつまでもそうしながら、自分でも何をととはつきりと分らないようなものを考えで追い続けていた。そしてその自分でもはつきりとは分らないもののため^ゆに自分の心が切ないほど揺らいでいるのを、私もまた切なくそれを揺らぐがままにさせていた。……

暫くしてから、私は観念したように閉じていた目をやつと見ひらき、出来るだけ心を落着けるようにして、自分の前にこの日記

を置いた。

一生受領ずりようだった父が、私のためにいろいろと気づかつて呉れて、私達をいまの中川のほとりの住居に移らせて下すつたのは、去年の秋の半ば頃だった。殿が私のためにあてがって下すつていた、これまでの家はますます荒れ放題に荒れてきて、もう住み難いばかりになっているとは言え、父の勧告に従って其家を去ってしまえば、同時に殿との間もこちらから絶やすも同様になるので、最近わざわざ志賀の里から引きとったばかりの養女の事など考え、さすがにそれを自分ひとりでは決し兼ねて、まあそう言えば殿の方でどうお出でになるだろうか、それとなくその移居の事をほ

のめかすように殿にお伝えして置いたのだった。けれども、殿からはその事については何んとも御返事がないばかりか、この頃は例の近江とかいう女の許へばかり繁々とお通いになって入らつしやると云うお噂を耳にしたので、私はいよいよもうこれまでと思ひ、殿にはなんともお断りせずに、父の言うとおりに中川の家に移つたのだった。大層山近く、河原に沿うた、ささやかな家で、本当にこんなところにこそ住いたいと年頃思つていたような住いであつた。——其処へ移つてからなお二三日は、殿はまだそれをお知りになつた様子もなかつた。ようやく五六日立つてから、「どうしておれに知らせてくれなかつたのだ」と御文を申し訣もうわけのように寄こされた。「お知らせいたそうかとも思いましたが、こ

ちらはあんまり片寄った処でございますので。本当に、せめてもう一度なりと、旧の処^{もと}でお会いいたしとうございました」と私が氣強くすっかりもう仲の絶えたようにして返事を差し上げると、殿の方でもお怒りになったかのように、「そうか、そんな不便な処ではおれには往かれそうもない」と言つて寄こされたぎりだった。それからその儘^{まま}、私達はどうとう仲が絶えた形になった。

九月、十月とたち、早朝など藪^{しとみ}を上げて見出すと、川霧が一めに立ちこめていて、山々は麓^{ふもと}すら見えないようなこともあった。それほど寂しい、それほど佗^{わび}しい住居に自分自身を見出すのが、私にはせめてもの氣休めになった。その川を前にして果てしもなく拡がっている田の面には、ところどころに稲^{いな}束^{なたば}が刈り干され

ていた。たまたま私達の許に訪れて来るような人でもあると、その青稲をそのまま馬に飼ってやっているのも、いかにもあわれが深かった。小鷹狩が好きなので、ときおり野へ出ては鷹を舞い上がらせたりしているものの、こんなところでもって一緒に暮らすようになった道綱は、まだ若いだけ、何んだかすべてが物足らなさそうに見えた。

そのままやがて冬になろうという頃、こちらではもうすっかり仲の絶えた気でいた殿の許から、突然、冬の着物を使いの者に持って来させて、これを仕立ててくれなどと言って来られた。「御文もありましたが、途中に落して来てしまいました」と使いの者がしきりに言い訣わけをしていたが、最初からそんなものはお持たせ

にならなかつたのだらうと思われた。私はもう意地を立てとおす気もなく、言われるなりにそれを仕立てて、こちらからも文を附けずに送って差し上げた。その後、そんな事が二度も三度も続いてあつた。なかなか仲が絶えそうで絶えないのが氣になつたが、それもまあこんな縫物位のためではと、私達の果敢^{はか}なかつた仲がいまさらのように思い返されたりしているうちに、その年も暮れたのだつた。

ながいこと大夫^{たいふ}の位より昇進しなかつた道綱が、ようやく右^{うまの}馬助^{すけ}に叙せられたのは、その翌年の除目^{じもく}の折だつた。殿からも珍らしくお喜びの御文を下さつたりした。今度の昇進はよつぽど道綱も嬉しいと見え、いそいそとして其処此処御礼まわりなどに

歩いていたが、その寮つかさ（右馬寮）の長官が丁度道綱には叔父にあたる御方なので、其処へも或日お伺いすると、まだお若いその御方は非常に歓よろこばれて、よもやまな物語の末、何処からお聞きになつて知つていらしたのか、私の手許に養つてゐる撫子の事を何くれとなくお問いになり、「御いくつになられました？」などと熱心に訊きかれたそうだった。歸つて来てから、道綱が私にその事を話して聞かせたが、私は「まあ、いくらお好色すきな方だつて、こんな撫子を御覧になつたら——」と答えたぎり、なんとも氣にはとめなかつた。

撫子は去年志賀の里から私の許に引き取られてきた頃から見れば、だいぶ大人寂おとなさびた美しさも具え出して来てはいる。そして幼

少の折からいろいろ苦勞をして来たせい、年の割には世の中の事は何もかも分かるようで、私の前なんぞでは山里に一人佗しく暮らしている母の事などを少しも恋しそうにはしない位、——だが、身体つきなどはまだ細々としていて、全体に何処となく子供子供している。初事^{ういごと}などはまだ遠そうである。——そういう誰の目にもつきそうもない小さな草花のように生い立っているこの少女を、まあその御方は何処からお聞きつけになって、もうそれに御目をかけられようとしているのだろう。……

右馬頭^{うまのかみ}

はその寮で道綱にお出合いなさると、話のついでにならず撫子について同じような事を繰り返してお尋ねになるらしか

った。最初は道綱も氣になると見え、逐一それを報告していたが、私の方で一向取り合おうとしなかったので、しまいにはもう私には何も聞かせないようになった。ところが、或日、夜更けてから帰って来るなり、もう私の寐^ねているところへ這入ってきて、「実はきようお父う様にお目にかかりましたら、お前の寮の頭がこの頃おれをしきりに責めるのだが、お前のところの撫子はどうしてもいるな、もう大ぶ大きくなつたろう、などと仰^{おつし}やっております。それから寮で、頭^{かんきみ}の君にお逢いしましたら、殿から何かそなたに仰せにはなりませんでしたが、と訊かれたので、その通りにお答えしますと、頭の君はそれをどうお取りになられたのか、それでは明後日が好い日だから御文を差し上げたい、などと私に言われ

るのです。私は何んとも御返事いたさずに参りましたが——」と生真面目な道綱はさも困った事になってしまったようにそれを話すのだった。私はそれを一通り聞くと、「まあ本当に何を勘がいなすって入らっしゃるのでしょうね。まだ撫子がこんなに小さいとは御存知ないからなのでしょうよ」などと事もなげに返事をして、心配そうな道綱を去らせた。そうして私もその夜はそのまま寝た。

さて、その日になると、矢つ張、頭の君から御文があつた。

「日頃からわたくしの思っておりまする事を殿にお頼みいたしておきました——」などと丁寧に書いて、殿からそちらへ自分で文を差し上げよと言われましたので、こうやって消息を認めまし

たと言つて来たのだつた。私はそれを受け取つて、まあ頭の君も撫子がこんなにおさな穉い事がお分りになりさえすればと、おかしい位に思つて、さしあたり返事はどうしようかと迷つていたが、いつその事この手紙を殿のところ^に持たせてやつて何んと仰やるか聞いて来させようと思つた。が、御物忌おもものいみやら何やらでなかなかそれを殿に御目にかける事が出来ないでいるらしかつた。一方、頭の君は頭の君で、こちらの返事のいつまでもないのをしきりに怨うらんで入らつしやるらしかつた。仲に立つて、道綱は一人で殆ど困つていた。ようやく殿の御返事のあつたのを見ると、「おれがどうしてそんな事をまだ許すものか。そのうち考えて置こう、と右馬頭には言つて遣つただけだ。返事はお前が好いように取做せ^{とりな}。

そんな姫のいる事さえ誰もまだ知ってはいない位なのに、若しそんな右馬頭でもそちらに通つたりしてみろ、お前がおかしく思われてもしょうがないぞ」といかにも心外な事らしく仰やつて來られた。そんな事を言われれば、こちらだって腹が立つ。その腹いせのように、私はつい大人げなく頭の君にも「ちよつと殿の許に使いを遣りましたら、まるで唐土もろこしにでも行つたように長いことかかつて、漸く御返事をいただいて参りました。しかしそれを見ますと、ますます私には分かり兼ねる事ばかりなので、何んとも返事のいたしようがございませぬ」と手きびしい返事を書いてやった。そんな風にいつになく腹を立てた後で、ふと気がつくとなんでもない事だろうと思つているうちに、急にすべての事がな

んだか思いもよらない方へ往つてしまいそんな危惧きぐが、其処には感じられないでもなかった。私はそれを感じると、何がなし心の引き締まるような氣もちがした。——そんなこちらの冷めたい返事にも、私の惧おそれたとおり、頭の君はすこしもお懲りにならず、それどころか反つて熱心に同じような御文をお寄こしになり出したのだった。もうそうになると、こちらではなるべくそれに取り合わないようにしているよりしようがなかった。

ところが、三月になり、或日の昼頃「右馬頭様がお出になりました」と言うことだった。突然だったのでびっくりしたが、私はすぐざわめき立った女房たちに「まあ静かにしてお出いで」とたしな

め、それを取次いだものには「好いから、いま、私達は留守だとお答えなさい」と言いつけた。

が、そうこうしているうちに、一人の品のいい青年が中庭からお這入りになっていらしって、目の疎い籬あらまがきの前にお立ち止まりになられたのが簾みすごしに認められた。練衣ねりぞを下に着て、柔かそうな直衣のうしをふんわりと掛け、太刀たちを佩はいたまま、紅色の扇のすこし乱れたのを手にもてあそんでいらしったが、丁度風が立って、その冠の纓えいが心もち吹き上げられたのを、そのままになさりながら、じつとお立ちになって入らっしゃる様子はまるで絵に描かれたようだった。

「まあ綺麗な方がいらっしゃること」奥の女房たちは、まだなん

にも知らずに、裳^もなども打ち解けた姿のまま、そんな事を囁^{ささや}き合
つて、簾^{みす}ごしにその青年を見ようとしてゐるらしかった。折から、
その青年の纓^{えい}を吹き上げていた風が、其処まで届いて、急にその
簾をうちそとへ吹き煽^{あお}つたものだから、簾のかげにいた女房ども
はあれよと言つて、それをおさえようとして騒ぎ出してゐた。恐
らくその青年に、そのしどけない姿を残らず見られたらうと思つ
て、私は死ぬほど羞^{はづ}かしい思いをしてゐた。

ゆうべ夜更けて歸つてきた道綱がまだ寐^ねていたので、それを起
しに往つてゐる間の、それは出来事だった。道綱はやつとそのと
き起きてきて、「生^{あいに}憎^{にく}きようはみんな留守でして——」などと
頭^{かんきみ}の君に言つてゐた。風がひどく吹いてゐた日だったので、先刻

から南面の^{しとみ}部をすっかり下ろさせてあつたので、それが丁度いい口実になった。

頭の君はそれでも強いて縁に上がられて、「まあ、^{わろうだ}円座でも拝借して、しばらくここに坐らせて下さい」など言いながら、其処で道綱を相手にしばらく物語られていたが、「きようは日が好かつたので、ほんの真似事にでもこうして居^い初^そめさせていたいただきました。これだけで帰るのはいかにも残念ですが——」と、すこし打^う菱^{しお}れた様子で、お帰りになつて往かれた。

「思つたよりも品の好きそうな御方だこと」そんな事を思いながら、私は簾^{しだ}ごしにその後姿をいつまでも見送つていた。

それから二日程してから、頭の君は私のところへ留守中にお伺いした詫^わびなどを言いがてら、「本当にあなた様にだけでもお目にかかつて、わたくしの真実な気もちをお訴えしたいのですが、自分の老いしやがれた声などどうしてお聞かせ出来よう、などといつも仰せられて私をお避けになるのは、それはほんの口実で、まだ私をお許し下さらぬからだと思われま^す」などと怨^{うら}んでよし「まあ、それはともかく、今夜あたりまた助^{すけ}にだけでもお目にかかりに参りましょう」と言ってきた。暮れ方、頭の君はお言葉どおりお見えになられた。しようがないので、ともかくも蔀^{ふすま}を二間ほど押し上げ、縁に灯をともし、^{ひさし}庇の間にお通しさせる事にした。道綱が出て往って、「さあ、どうぞ」と言つて、妻戸をあ

け、「こちらから——」と促すと、頭の君はそちらへちよつと歩みかけられたが、急に思い返したように後退あとずさつて、「お母あ様にここへはいるお許しを願つて下さいませんか」と小声で押問答していた。やがて道綱が私のところに来て、それを取り次いだので「そんな端近くでも構いませんでしたら——」と返事をさせた。頭の君はその返事を聞くと、少しお笑いになりながら、もの静かに衣きぬずれの音をさせて、妻戸からおはいりになって来られた。

ときおり向うの庇の間から、頭の君と道綱とが小声で取交わしている話し声に雑まじつて、笏しやくに扇の打ちあたる音が微かに聞えてくる。私どものいる簾の中は、物音ひとつ立てず、しいんと静まり返っていた。それから稍ややあつて、頭の君はまた道綱に取り次がせ

て、私に「こないだはお目にかかれずに帰りましたので、又お伺
いいたしました」と言つてよこした。そうやつて何度も間に立た
されている道綱が「早く何んとか言つて上げませんか」としきり
に私を責めるので、私はしようことなくきちよう几帳の方へ少しいざ
り寄つては見たものの、勿論、私の方から何も言い出すことはな
いので、そのまま無言でいた。頭の君はいざとなつて、私に何ん
と言つたらよいのか、当惑なすつて入らつしやるような様子だつ
た。なお、そのままにしていたら二人の間がいよいよ氣づまりに
なつて往きそうだったので、自分がそこにいる事を頭の君が或は
まだお氣づきにならないのかも知れぬと思つて自分がそうしたよ
うにお取りになればいいと、私は少し咳払いをした。ようやつと

頭の君は口を切った。

志賀の里から誰にも知らさないようにしてこつそりと私の許に^{もと}引きとられた少女の事をひそかに聞き、その物語めいた身の上に何んと云うこともなしに心を惹^ひかれてい^るうちに、だんだんその未知の少女の事を心に沁^しみて思いつめるようになったなりゆきを、最初は妙に取り繕ったような声だったが、次第に熱を帯びた声になつて、頭の君は語り出されたのであつた。私はそういう頭の君の話をはじめから仕舞いまで、それに思いがけない好意さえもちながら、黙つて聞いていたが、漸^{ようや}くそれを聞き^き畢^{おわ}り、こんどは自分^{おきな}が何か言わなければならない番になつたけれど、やはり何んと^{おつし}しても私は「何を申そうにもまだ姫は大へん穉いので、そう仰

られるとまるで夢みたいな気がいたす程ですから——」とお答えしているより外はなかった。

それは雨が乱れがちに降っている暮れがただった。あたり一めんを掩おおうように蛙の声が啼なき渡わたっていた。そのまま夜が更けてゆくようなので、さつきから庇の間に坐られたぎり、一向お帰りなさろうとする様子も見えない頭の君に向い、「こんなに蛙が啼いて、こうして奥の方にいる私どもでさえ何んだか心細い位ですのに。あなた様も早くお帰りになつては」と私は半ばいたわるように、半ばたしなめるように言った。

頭の君の方では、そういう私の言葉をも反つて身に沁むようにして、只「そういうお心細いような折こそ、どうぞこれから

は私を頼りになすつて戴きたいものです。そんなものなんぞ、私は少しもこわがりはいたしませんから——」と応^{いら}えるばかりで、いつまで立つてもお帰りなさろうとはしないように見えた。だんだん夜も更けて来るようだし、皆の手前もあるので私は一人で困ってしまっていたが、それぎり物も言わずにいると、とうとう頭の君はお帰りなさるらしい気配を見せて、「助^{すけ}の君^{きみ}の御^お祓^{はらい}ももう間近かでお忙しいようですから、何か御用がおりになれば代りに私にお言いつけなすつて下さい。これからは度々お伺いたす積りです」と言い残しながら、漸^やつとお立ち上がりになった。

私は何気なしにその後姿を見ようと思つて、ふと几帳の垂れをかき分けながらいま見をすると、いま、頭の君のいらした縁

の灯はもうさつきから消えていたらしかった。私の座の近くにはまだ灯がともっていたものだから、それには少しも気がつかずにいたのである。それではさつきから闇の中で黙って頭の君は私の影を御覧になつていたのかと驚いて、私はあまりと言えばあまりな頭の君を「まあ、お人の悪い。灯のお消えになつてゐるのを仰やりもしないで——」と鋭くたしなめるように言い放つた。頭の君はしかし、それが聞えなかつたようなふりをなすつて、黙つたまま立ち上がつて往かれた。

私はその跡、自分の近くの灯をそむけて、薄暗いなかにひとりそのままじつと目をつむっていた。そして私はその目のうちに、自分自身のこうしている姿を、ついまいしがた頭の君に偷^{ぬす}見せ

られていたでもあろうような影として、何んと云うこともなく蘇よみがえらせていた。それは半ば老いて醜く、半ばまだ何処やらに若いときの美しさを残していた。そうしているうちに、私がだんだん何とも云えず不安な、悔やしいような心もちに駈りやられていったのは、そういう自分の影がいつまでも自分の裡うちに消えずにいるためばかりではなかった。それはさつきあんなに狼ろうばい狽ばいを見せて頭の君をたしなめたときの、自分自身を裏切った、自分の嗔しやがれた声はまだそこいらにそのままそっくりと漂っているような感じのし出して来たためだった。

私はそういう一見何んでもないように見える事のために、思いがけないほど自分の心が揺らぎ出しているのを、しようちことなく

揺らぐがままにさせていた。……

その三

頭かんきみの君はそんな事があつてからも、私がそれをそれほど苦にしていようとは夢にもお知りなされない風に、相変らず、何かと道綱のところに来られては、撫子の事で同じようなことのみ道綱を仲にして私に言ってお寄こしになっていた。

私も、さりげない風をして、「姫はまだ小さいから——」と同じような返事ばかり繰り返させていた。それに丁度道綱がこんどの賀茂祭の御祓おはらいには使者に立つ事になっていたので、何かとそ

の支度をしてやらなければならないので、私はそれをいい事にその方にばかり心を向け出していた。自然、撫子の事やなんぞで何んのかのと私をお苦しみになられる、頭の君の上からは心をそらせがちだった。——頭の君も頭の君で、毎日のように、役所の往き歸りに道綱のところに立ち寄られては、何かと先輩らしく世話を焼きながら、御自身は御祓の果てる日を空しく待たれているらしかった。

ところが或日、道綱は、往来で犬の死骸を見かけたと言つて出先きから戻つて来た。そうやって、その身の穢けがれた上は、御祓の使者は辞さなければならなかった。一方、道綱がそうして忌いみにこもり出すと、頭の君はこんどは又役所の用事にかこつけては、前

よりも一層繁々とお立ち寄りになり、いつまでも上がり込まれて、あれから頭の君がいくら入らしてもお会いしない事になっている私に何んでもしてもう一度会えるような機会をお求めになつて入らっしゃるらしかつた。

人の好い道綱は、そんな私達のくさび楔になつてゐるのを苦にして何かと責め好い私の方ばかりを責めるのだつた。そうになると、皆の手前も、私はあんまり自分だけが強情にしているように見えるのも何んだから、いつその事なりゆきを自分でない他のものにすっかり任せるような氣もちになつて、道綱を再びもと殿の許へ使いに遣ふことにした。ことによると又殿が前のようにその事で何んとかとか私をお意地めなさりはすまいかとも思われたが、そうされ

たらばされたで又その時次第の気もちで頭の君の方へも今の自分には言われない事も言われようと氣構えしていたところ、殿はこんどはひどく御機嫌好きそうに、「そんなに右馬頭うまのかみが熱心にいるのなら、八月頃にでも許してやると好い。それまで心変りせぬようだったら」などと言つて寄こされた。それは思いがけなかったが、しかし八月頃と聞いて、私は何んとなくほつとした。まだその八月までには大ぶ間がある、それまでに何かその殿の一言で決せられた運命から撫子をまぬがれしめるような事がなぜか知ら起りそんな予覚が私にしないこともないからであつた。「八月まで待てとはまあ何んという待遠しさでしょう」頭の君もそれと同じような予覚からか、殿の御返事をお告げすると、あたかも私を

怨む^{うら}ように言つて来られた。「せめて五月にでもなつたらと思つて居りましたのに。——せつかく私のところへ来かかつているように見える時^{ほととぎす}鳥も、あんまり不運な私を厭^{いと}うて、このまま立ち寄りもせずに、私から去つて往つてしまうような気がいたされてなりませぬ」しかし、どうして私にばかり頭の君はそう怨むような事を言つて来られるのだか分からない位である。

そのままその四月も半ばを過ぎた。

四月の末になり、橘^{たちばな}の花の匂の立ちだした或夜、だいぶ更けてからだったか、私は自分にいろいろの事を言つてよこされる頭の君を、不本意ながら撫子をそのうちお許しすると御約束した以上

はそう素気なくばかりも出来ないの、^{すげ}ともかくもお通しさせる事にした。頭の君はこんどは、前とは打って變つて、重々しい態度をして入らしたが、二人ぎりになつたとき私に向つて言い出された事は、しかしいつもと少しも變らない怨み言だつた。あんまりその事ばかり繰り返して仰^{おつし}やるものだから、反つてしまひにはその仰^{おつし}やつてゐる事に最初ほどの熱意がないようにさえ——そして只それでもつて私を苦しめなざるためにのみ、それを私に向つて繰り返してばかり入らつしやるようにも——私には思へたのだつた。

「まあ、何んと思し召して、その事ばかり仰やるのでしょね」と私はもうそれを打切らせようとして、「何度も申しましたよう

に、まだほんの子供で、どうやらまあその八月頃にでもなったら、
ういごと初事もあろうかと心待ちにされている位なのですから——」と、
そんな事までずばりと言った。

そう私に言われると、さすがに頭の君も二の句を継げなそうに
していられたが、

「でも、いくらお小さくとも、物語ぐらいはし合うものだと聞いて
おりますが——」と暫くして言い出された。

「姫はまだそんな事も出来そうもないほど、幼びているのです。
誰にでも人見知りをしようがない位なのですからね。」

私はみす簾ごしに、だんだんしよ稍げたようになって私の言葉を聞いて
いらつしやる頭の君を見透しながら、更らにすげなく言い続けて

いた。……

「そう仰やられるのをこうして聞いておりますと、只もう胸が一杯いになつてきて溜まりませぬ」そう言つて、頭の君はどうとう身もだえするようにその場に顔を伏せた。

「何故、そう私にはつらくおあたりになるのでしょうか。まあ、そうまで仰やられなくとも。——いいえ、もう私はなんだか自分で自分が分かりませぬ。せめて、その簾のなかへでも入れさせていただけましたら……」

だんだん興奮してきながら、何を言っているのだから自分にも分からないような事を言い続けているように見えた頭の君は、そのとき突^{とつさ}嗟に——どうしてもそう考えてやったとは思われないほど

突嗟に——ずかずかと簾の方に近づいて、それに手をかけそうにせられた。

私はそれまでそれを半ば目をつむるようにして聞いていたが、いきなりそんな事をせられそうなのに気づくと、思わず後ずさりながら、突嗟にきつとなつて、「まあ、簾に手をおかけになるなんて、何という事をなさいます？」と声を立てた。同時に私はその簾の外側から、それに近づいた頭の君と一しよに縁先きに漂っていたにちがいない橘の花の匂がさつと立ってくるのを認めた。私はその匂を認め出すと、急に自分の心もちに余裕が生じでもしたように、一層きびきびと、「夜更けて、いま頃になると、いつも余所^{よそ}ではそんな事をなさるのでしようけれど——」と言い足し

た。

そういう冷めたい、それなりに何処となく熱の籠こもつたような私の言葉が、思わず頭の君を、もう手をかけそうにしていた簾から飛びすさらせた。「そんな御あしらいしかなされまいとは夢にも思いませんでした。」頭の君は其処に再び顔を伏せながら、「暫くなりと簾のなかへ入れていただけたら、只もうそれだけでよろしゅうございましたのに。若しこんな事で御気色けしきを悪くせられたようでしたら、重々お詫わびいたしますから——」と詫わびられていた。

私はそういう頭の君に更に圧おしかぶせるように「いくら私が年をとっていて、私の事を何んともお思いなさらずとも、簾の中へ

御はいりなさろうというのは、まあ何んという事です。その位の事が御わかりにならないあなた様でもありますまいに——」と言いつづけていたが、そのままその場に居すくまれたようにして入らつしやる頭の君を見ると、さすがに少しお気の毒になつてきて、それから急に語気を落すようにしながら、「昼間、内裏うちなどに入らつしやるようなお積りで、此処にだつて入らつしやれませんか？」と半ば常談のように言い足した。

「それではあんまり苦しゆうございましょう」頭かんの君きみは、そういう最後の言葉をもほんの常談として受け取るだけの余裕もないほど、悄しよげ返かえつて、そのままずうつと縁の方まですさつて往かれた。さつきの橘たちばなの花の匂はそちらから頭みすの君が簾みすの近くまで持ち込ん

で来たのにちがいがなかった。

私はふと、その一瞬前の何んとも云えず好かった花の匂を記憶の中から再びうつとりと蘇^{よみがえ}らせていた。それがそのまま暫く私を沈黙させていた。

頭の君はそういう私をすっかりもう自分の事を取り合おうとはしないのだと御とりになつて、「何だかすつかり御気色をお悪くさせてしまひまして。もう何も仰^{おつし}やつて下さらなければ、私は歸つた方がよろしいでしょう。——」

そう言つて、頭の君は、さも私を怨^{うら}むように爪^{つま}はじきなどなさりながら、なおしばらく無言で控えて入らしたが、頭の君がそうお思ひになつて居られるならそれでもいい、と私が更らに物を

言わずにいたものだから、とうとう立ち上って帰って往かれるらしかつた。

丁度月のない晩だったから、私は松明^{まつ}などお持たせするように言いつけた。しかしそれさえ受け取ろうとなさらずに、頭の君は何かすねたように、橘の花の匂の立ちこめている戸外へお出になつて往かれた。

そうひどく気もちを拗^こじらせたようにしてお帰りになつたので、もう当分入らつしやらないかも知れないと思つていたが、翌日になると、又頭の君は役所へ出がけに道綱のところへいつものように「御一しよに参りましょう」と誘いにきた。いそいで道綱が出

仕の支度をしている間、硯すずりと紙とを乞うて、一筆認めしたた、それを私の許もとに持つて来させた。見ると、ひどく震えた手跡で、「前生の私にどんな罪過がありましたので、私はいまこうも苦しまなければならぬでしょう。このままもつと苦しめられるようでしたら、私はとても生きておられそうもありません。何処でも私を入れて呉れるところがありましたら、山にでも、谷にでも。――しかし、もう何もいいませぬ」と認められてあつた。

私はそんな頭の君のような若い御方の仰やる苦しみなんぞは口ほどの事もあるまいと思つたが、それでもそのひどく震えたような手跡を見ると、さすがに胸が一ぱいになつて来、いそいで筆を走らせて、「まあ、そんな恐ろしい事を仰やるものではあ

りません。あなた様がお怨みなさるべきは、この私ではないではありませんか。山のことも一向不案内なわたくし、まして谷のこ
となどは——」と認めて、すぐ持たせてやった。

それから暫くして、頭の君はいつものように道綱と一つ車で、役所に出かけて往ったようだった。

その夕方、頭の君は再び道綱と同車して帰って来られた。そうして私のところへ又、何かお認めになって寄こされた。こんどは見違えるばかり鮮な手跡で、「けさほどはたいへん取り乱した事を申し上げて恐れ入りました。仰せ下さいました事、しみじみ胸に沁しみました。私はきようは本当に生れ変ったような気がいたしております。これから、もっと気をしっかりと持って、殿の仰

せどおりにお待ちいたす決心をいたしました。只、それまでは他に何んのなす事もなく、無聊ぶりようであります故、どうぞ縁の端にでもおりおり坐らせて置いて下さいませんか」と書かれていた。

まあ、そう急に神妙なお気もちになられたってそれがいつまで続くことやら。そうも思われたものだから、ともかくも今後を見ていようという気で、私はそれには差しさわりのないような返事しか差し上げなかった。その夜は頭の君もすぐお帰りになられたらしかった。

そんな事があつてから暫くは、頭の君も何かと遠慮がちになされて、私達のところへも余りお立ち寄りにはならなくなつた。只

隙ひまさえあれば、道綱を呼びにお寄こしになって、別に為事しごともないのにいつまでもお手放しにならなかった。それにはさすがの道綱も殆ど困っているらしかった。

私も私で、撫子などを相手に、再び昔に返ったような無聊な日々を迎え出していた。昔に返ったような？——しかし、それらの日々は私にとっては、前よりかもっと無聊で、もっと重くろしいところのあるのを認めない訣わけにはいかなかった。私はそれをば撫子にも話して置かなければならない事をまだ話していないことの所為せいにしていた。どうせいつか話さなければならぬのなら———と思ひながらも、撫子のまだ余りに子供じみた身体つきや、もううすうす頭の君の求婚の事を勘づいていて、私からそれを聞か

されるのをそれとなく避けているとしか思えない折々の差かし^{はず}そんな様子だのを見ると、私にはどうしてもその話が持ち出せないのだった。

そういう撫子の差かしそうな姿が気になってならない時など、どうかして縁の方から橘の花の重たい匂が立つて来たりすると、いつかその簾のそとに打ち^う萎^{しお}れていた、若い頭の君の艶な姿が、ふいと私には苦しいほどはつきりと^{おもかげ}倂に立ったりするのだった。

……

そんな或日の事、思いがけず道綱が殿の久しく絶えていた御消息を私のところに持って来た。何事かと思つて、私はいそいで^{ひら}披

いて見た。「この頃よく右馬頭うまのかみがそちらへ参るそうな。八月まで待たせなさいと言つてあるのに。人の噂によると、なんでもお前が右馬頭を派手にもてなしてやっているそうではないか。お前に会えるのだったら、怨みの一言も言つてやりたいものだ」

その消息を手にしたまま、余りの事にしばらく私は空うつけたようにさえなつていた。こんな事を、あの氣位の高い殿がよくもまあ私になど仰やつて来られたものだ。事もあるうに、あんなお若い頭の君のことで私をお疑ぐりなさるなんて。——そう思うと、何より先きに、ひとりでに苦笑とも冷笑ともつかないようなものが私の胸の裡うちにおさえ兼ねたように込み上げて来た。その一方、何とも云えず悔やしいような氣もちもしないではいられなかった。

……

そうやってその消息を手から離しもしないで、しばらく空けたようになつていた私は、やつと氣を変えて、ともかくも早速殿に何んとか返事を差し上げなければならぬと思つた。が、何を書いても、誰が誰に向つて書いても同じような^{いいわけ}弁^{いいわけ}疏^{いいわけ}めいた事しか書けそうもなかつた。そんな事位でこちらの心をお疑ぐりになるのを反つて殿にお怨み申したい——そう自分でありたいと思うような氣もちには、しかしどうしても今の私はなれなくなつていた。自分の心が既に殿からはこんなにも離れてしまつてゐるのかと思つて、私はみずから驚いた位だつた。

私はそのまま悔やしそうに、その殿の手紙の裏に何んと云うこ

ともなしに散らし書きをし出していた。こういう今の自分の何もかもを引括ひっくるめて自嘲したいような気もちにしかねれず。――

いまさらにいかなる駒かなつくべき

すさめぬ草とのがれにし身を

私は殿には返事を差し上げる代りに、そんな歌だけ書いてお送りする事にした。それを道綱に持たせてやった後も、しかし私はいつまでも自分の裡に何物に対するともつかない、果てしない不満のようなものが残っているのをどうしようもなかった。

頭の君はこの頃も相変らず、何かと言つては道綱を呼びに寄こ

したり、又遠慮がちに道綱のところに御自身でも入らしたりな
 すっているらしい。頭の君はこんどの事は何も御存知ないのだから、別にかれこれ言うこともないので、私はそのまま勝手にさせておいた。そのうち五月になった。時ほととぎす鳥がいつになくよく啼ないた。昼間からこんなに啼くことも珍らしい。廁かわやにはいつていて、ほととぎすの啼き声を聞くのは悪い前兆だといって昔から人々が忌むらしいが、私は屢しばしばそれをすら空けたように聞くがままになつていた。……

いつか世の中は長ながさめ雨にはいり出していた。十日たつても、二十日たつても、それは小止おやみもなしに降りつづいていた。

或夜など、雨のためにひさしく音信おとずれのなかった頭の君から突然道綱もとの許もとに「雨が小止おやみになつたら、ちよつと入らしつて下さい、是非お会いしたい事がありますから。どうぞお母あ様には、自分の宿世すくせが思い知られました故何も申し上げませぬ、とお言付ください」などと、何を思つたのか、書いて寄こされた。——そこで道綱が何やら氣になるような様子で、雨の中をわざわざ訪ねてゆくと、別に何の用事もなかったらしく、ただ頭の君に人懐きそうにもてなされ、女絵など一しよに見ながら常談を言い合つて、夜遅く再び雨に濡れて歸つて来た。

撫子の方も撫子で、この頃は何か鬱ふさいだようになっている。日ねもす、閉とじ籠こもつたまま、琴などを物憂そうに掻き撫でたり、そう

かと思うと急に止めたりして、少しいらいらしたようにして暮らしている。——こういう物忌ものいみがちな長雨頃の、そういう若い人達の、何処へも持ってゆき場のない、じつとしていたくともじつとしていられないような気もちは私にもよく分かつていた。そればかりではなかった。私は絶えてここ数年というもの感じたことのなかった、そういう何処へも持ってゆき場のないような気もちを、撫子なんぞのために思いがけず蘇よみがえらされたようで、——しかし、今の私にはその昔日の堪え難さそのものさえ、それと一しよにそれが自分の裡うちに蘇らせるもののためにか、反って不思議になつかしい気のするものだった。私はそういう心もちに誘われるがまま、一人きりで端近くに出ては、雨にけぶった植込みなどをば

んやりと見入っていたりする事が多かった。まだ殿もお通いにならなかつたような若い頃、よく自分がそうやっていたように……

そんな長雨のつづいている間の、すこし晴れて、どこことなく薄月のさしているような晩だった。

きようはひさしぶりの雨間に、さつきから頭の君が道綱のところに来ていられたようだったが、そのうち知らない間に一人でこちらへ入らしてしまわれた。そうしていつもの縁の端に坐られて、例の撫子の事、いつまでもこうして一人でいなければならぬ苦しさなどを、何かと私にお訴えになり出した。「もうあとのみつき三月ばかりなど、すぐ立ってしましましょう」私はいつもの冷や

かな、突つ放すような調子で言つた。

「それが反つて中途半端で、この頃私にはますます苦しいのでございます」頭の君はそれには構わずに、自分の言おうとする事は押し切つても言つてしまわれようとするように言い続けられた。

「御約束下さつた日は、あともう三月と申せば、向うに見えて居るも同然なものではございますが、それでいてこのまま只今のように空しく待たされて居りますと、どうもそれに一日一日と近づいて往かねばならぬのがいかにまだるも緩く、もどかしくて、反つてそれに近づけば近づくほどその日が遠のくように思われてなりませぬ。もういよいよと言うところまで待つても、私はそのとき自分が此どうにもならない堪え難さのためにどうかしてしまひはせ

ぬかと不安で溜^{たま}らないのです。どうか私からその不安を取り除くように、何とかお計らい下さいませんか」だんだん哀訴するような調子になって来ていた。

そうなればなるほど、私はますます取り合わないように、「まさか私に殿の御曆の中を裁^たち切^きつて、すぐ八月が出るように、つないでくれと仰^{おつし}やるのではないでしょうね？」と思わず笑いを立てながら言ったりした。

頭の君はしかし、にこりともなさらずに、簾^{みす}の方をじっと見つめて入らした。そのため、私はその簾の中に自分の立てた笑いがいつまでも空虚^{うつろ}にひびいているような気もちになったほどだった。私はそのときふいと殿の御手紙の事を思い出しながら、「そ

れは御無理な事です。それに、この頃は殿にもこちらから御催促しにくいような事情になりました……」

「それは又、どうなすったのですか？」頭の君は心もち縁からいざり寄られた。

これはまだ言うのではなかった、と思つたけれど、私はすぐ又、そう、いつそ此事は早くお知らせしておいた方がよくはないかしら、とも思い直して見るのだつた。しかし自分の口からはさすがに言い出しにくいので、その殿から寄こされた御文をそのまま、頭の君にお見せしたくないところだけ破り取つて、「これを御覧なすつて下さいまし。御目にかけてもしようのないものですけれど、まあ、これで殿に催促しにくい訣^{わけ}がお分かりになるでしょう

から——」と言いながら、簾の下から差し出した。

頭の君はそれを手にせられると、ずうつと縁の先まで滑り出して往かれて、微^{かす}かに差ししている月あかりにすかしながら、それをいつまでも見入っていられた。

そうやってながいこと見て入らした後、頭の君は何やら口籠りながらそれを簾の下から、こちらへ差し入れられた。それから漸^やつと聞えるか聞えないほどの声で、「御料紙の色さえわかり兼ねます位で、折角ながら何んとも読めませんでした」と言つて、再び縁の方へすさつて往かれた。

私は頭の君に巧みにすかされたような気がして、「いいえ、こんなものはもう破いてしまえますから——」と悔やしそうに言つ

たものの、しかしそれにはすぐに手を出そうとしなかった。

頭の君が縁の方から再び言われた。「どうぞお破りにだけはならないで下さいまし。昼間、もう一度、拝見させて戴きとうございます」何処までもそれが読めなかったような御様子になさろうとして入らっしゃるらしかった。それからそのまま頭の君は無言でお控えになつておられるかと思つていたら、一人で何を口ずさんで入らっしゃるのだから分らないような事を口ずさんで入らした。……

「あすは役所の方へは助の君に代りに往つていただいて、私はこちらへもう一度、それを拝見に参りますから——」頭の君がそう言い残されて、其処を立ち去つて往かれたのは、それから間もな

くの事だった。

その跡で、私は半ば気の抜けたように、その簾の下に差し入れられたままになっている殿の御文を破ろうとするのでもなく、手に取って見ると、まあ何とした事か、私は頭の君に御目にかけてたくなひと思つて破つたところを反対にあの方に御目にかけてしまつていたのだった。その上、誤つて御目にかけた紙の端が半分ほど更に引きもがれているのに気がついた。私にはすぐ、あの薄月の微かに差している縁先きで頭の君が帰りぎわに何かしきりに口ずさまれて入らした姿が思い出された。

私はその頭の君に見られた紙片の丁度裏あたりに、あのととき自分で自分を嘲ける^{あざ}ように一ぱいに散らし書きをしたままであつた

のを、それまで忘れるともなく忘れていたのだった。——「いまさらにいかなる駒かなつくべき……」

私はふと口を衝いて出たその文句が自分の胸を一ぱいにするがままにさせながら、なぜか知ら、撫子の悲しい目^{まな}ざしを空^{くう}に浮べ出していた。いまにも私に物を言いかけそうにして、しかしすぐに何んにも言うまいと諦めてしまうような、撫子のしおらしい目^{まな}ざしが、それまでついぞそんな事はなかったのに、その夜にかぎって私の目のあたりからいつまでも離れなかった。

その四

その翌朝、頭の君は道綱の^{かんきみ}ところへ使いの者に、風邪気味で役所へ出られそうありませんから一寸お出がけにでもお立ち寄り下さい、とことづけて来させた。ゆうべの出来事を少しも知らない道綱は、又例の事かと思つたらしく、いつまでも出仕^{しゅっし}の支度をぐずぐずしていると、再び使いの者が来て、お待ち兼ねのようですからどうぞ早く入らして下さいませ、としきりに催促しているらしかった。何んの用があるのか分からなかったけれど、何か私にも気がかりでない事もなかった。

が、そのとき頭の君は私の方へも別に御文を持ってよこされたのだった。披^{ひら}いて見ると、「風邪気味で、折角ゆうべ御約束したものを拝見に伺えず、なんとも残念でなりません。私なんぞには

そんなく
忖度

いたし兼ねます事ながら、何か殿にわざと御催促なさりに
くいような御事情がおりなさいまするなら、然るべき折を見て
なりと、よいように御取りなし下さいまし。此日頃、われとわが
身が不安になるほど何が何やら分からず思い乱れておるような私
の気もちをも御推量下すつて」といつもに似ず乱雑な、読みにく
いほどな手跡で、したた認められてあつた。

私はいろいろ考えあぐねた末、それに対する返事はそのまま出
さずに置いた。

しかし、あくる日になつてから、矢つ張それぎり返事を差し上
げないのは、反つてこちらで何んだかこだわっているようで、若

々しい遣り方やかたではないかと私は考え直して、いかにも何気なさそうに返事をすることにした。「きのうはこちらに物忌ものいみなどいたす者がございまして、御返事もつい書けずにしまいました。その事をどうぞ川水の淀みよどでもしたかのように、心あつてかなんぞとはお思いにならないで下さいまし。殿へはこちらからは使いをやるよすがさえ無いのが、御存知のとおり、今のわたくしの果敢はかない身の上。——御文の紙のいろは、昼間御覧なすつても、同じように覚束おぼつかのうございましょうとも」

夕方、その文を頭の君の許へ届けに往った使いの者は、先方に法師姿をしたものがおおぜい集つてごつた返していたので、只、それを置いて参りましたと言つて戻つて来た。

まだ風邪気味で寐^ねていらつしやるらしい頭の君から「きのうは法師共がおおぜい参っておりまして上、日も暮れてからお使いの方が見えられましたので——」などと言いわけがましく書いてよこされたのは、その翌日になってからだつた。「——ここ数日、どうしたのか私の庭を離れず、一羽のほととぎすが卵^うの花^{はな}の蔭^{かげ}な どでしきりに啼^なき立^たてておりますが、こうして日ごと一人きりで歎^{なげ}き明^あかしてばかりおる私にすっかりなつきでもしたと見えます。

なげきつつ明し暮らせばほととぎす

この卵の花のかげに啼きつつ

まあ、一体、私はこのほととぎすと共にどうなることでしょうか知ら」

いかにも何事もなげながら、どこことなくお心のうめきをお洩らしになって入らつしやる、そのような御文を読み返しているうちに、私はつい知らず識らずの裡うちに、苦しんでいるのが相手の方であるときいつも自分の内をひとりでに充たしてくる、一種言うに言われぬ安らかさを味い出している自分自身を見出さずにはいられなかった。……

それから数日後、突然、おじ君にあたられる左京頭さきようのかみがお亡くなりになられたので、頭の君もその喪に服せねばならなくなり、殿の御約束せられた八月を前にして、私共に心を残されながら、

しばらくその病後の御身を山寺へお籠こもりになられ出した。山からは、最初のうちは絶えず御消息をおよこしになられた。それは相変らず独居の淋しさと撫子を求める切なる希ねがいとに充たされていた。しかし私はその頭の君の御文のなかの独居の淋しさをお訴えなさる御言葉がなんとも言えず切実に身にしみて覚えられれば覚えられるほど、一方、撫子をお求めになられる同じ文中の御言葉が、なぜか知ら、いよいよ空疎なものに見えて来るのに気がつかないわけには往かなかつた。恐らくそれにはただ私だけが気がついていいるのだという事も自分には分かっていた。それが一層私を身じろぎもできないような苦しい心もちにさせていた。そのうちにそんな頭の君の御文がだんだん途絶えがちになって来るような

のに、私が気がつくかつかないうちに、突然、それが絶えてしまった。絶えてから、私ははじめてこうなるだろう事を前から何んとはなしに予知していたような気さえたのだった。しかし頭の君が山を下りられたらしいお噂はついぞまだ聞かなかった。

.....

私は此日記を仕舞わないうちに、もう一言附け加えておきたいと思う。左京頭の喪のために山に籠られたぎり、そのまま行方知れずのようになられていた頭の君が、実はいつの間にやら他人の妻を偷ぬすまれて何処ぞへこっそりとお姿を暗くらましてしまわれたの

であるという事が分かったのは、もう七月もなかばを過ぎてからだった。その事を知った当初は、あまりといえばあまりな出来事に心が擾みだれて、そういう頭の君に対する思いがけない程のはげしい憤りやら、自分のした事に対する悔いやらを感じずにはいられなかったが、漸ようやくいつもの落着いた自分に立ち返った今はもう、何やら自分でもわけの分からぬ身の切なさを除いては、私の気もちも割合に静かになっている。

女房たちはそんな私に向つて言うのだった。「もう御約束の日も間近かになつておりましたのに、あれほど御執心なすつて入らした姫君を措おいて、あの方とした事が、まあ何んという事をなすつたのでございましょうね。本当にあまりといえばあんまりな

……」私はそういう人々のおなじ繰り返しのような慰めの言葉はどうも無関心に聞き流しているよりしようがなかった。

が、そういう頭の君のこんどの唐突な振舞も、少くともいまの私にだけは、そうなさるべくあの方を余儀なくせしめたようなお心の動きの全然分らない事もないような気がする。否、むしろ、もう殆ど手に入れられるばかりになっていた撫子をいつまでもあの方に限りなく遠いところにあるかのように思わせ、あの方のお気もちをわざと焦^しらし抜いて、御自分で御自分がもう何を欲していらっしゃるのかさえ見分けられないようにおさせして、とうとうこんな思いがけないような結果にならせてしまったのは、この日頃の私、——いつの頃からか男という男のあらゆる運命に対し

てともすれば皮肉になりがちな、しかもそんな自分を自分でもどうしようもない、この私の所^せ為^いだったのではなからうか。そんな気にも私はどうかするとなり兼ねないのだった。……

そういう一抹の不安のないこともない私に、道綱が何かそわそわとして黙って一通の文を届けてくれたのは、丁度きのうの事である。まあ、おめずらしい、殿の、と思ったら、それは思いがけず頭の君のだった。しかし、道綱の手前、何気なさそうにして手にとつて見ると、「本当にわれながら浅ましい姿になり果てました。いくら心にもないことだと私が申しましても、お聞き入れにはなさいますまい。こんなどうしようもない羽目にならない先きに、どうしてもう一度なりとあなた様のお目にかかつてしみじみ

とお語らいしなかったのだろうと、悔やまれてなりませぬ。――」

そのあとに何やら歌のようなものが書かれてあつて、その上
墨で消されてあつた。私はその一部分を辛うじて判読した。「：

…をしむはきみが名……」

私はつとめて冷めたい顔をしたまま、その紙を徐かに巻き出し
ていた。道綱は私の前に据わつたまま、別にその文を見たくもな
さそうにしていた。そしてしばらく、二人は何んとも言わずにい
た。しかし、そのながい沈黙は、私にとっては、何か心いちめん
に張りつめていた薄氷^{うすらい}がひとりでに干^ひわれるような、うすら寒
い、なんとも云えず切ない気もちのするものだった。……

青空文庫情報

底本：「昭和文学全集 第6巻」小学館

1988（昭和63）年6月1日初版第1刷発行

底本の親本：「堀辰雄全集 第2巻」筑摩書房

1977（昭和52）年8月30日初版第1刷発行

初出：「文藝春秋」

1939（昭和14）年2月号

初収単行本：「かげろうの日記」創元社

1939（昭和14）年6月3日

※底本の親本の筑摩書房版は創元社版による。

※初出情報は、「堀辰雄全集 第2巻」筑摩書房、1977（昭和52）年8月30日、解題による。

入力：kompass

校正：松永正敏

2004年2月27日作成

2010年11月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.waozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ほととぎす

堀辰雄

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>